

保育内容：領域「環境」における授業内容の一考察
—授業展開の実践より—

栗 岡 あけみ

A Study on the Classes of the Contents of Early Childhood
Care and Education “Environment”
-From the Perspective of Classroom Practice-

Akemi Kurioka

豊岡短期大学 論集

第 14 号 別 冊

平成 30 年 2 月 28 日 発 行

保育内容：領域「環境」における授業内容の一考察 —授業展開の実践より—

A Study on the Classes of the Contents of Early Childhood
Care and Education “Environment”
-From the Perspective of Classroom Practice-

栗岡 あけみ

Akemi Kurioka

1. 問題と目的

現在、中央教育審議会において、幼稚園の学習指導要領の見直しが検討され、平成 30 年度の施行が決まっている。平成 28 年 8 月 26 日に行われた「教育課程部会幼児教育部」での審議では、次期に向けて次のようにまとめている。

まず、『ii 幼児教育において育みたい資質・能力の整理と、小学校の各教科等との接続の在り方』では、幼児教育においては、小学校以降のようないわゆる教科指導で育むのではなく、幼児の自発的な活動である遊びや生活の中で育むことが重要である¹としている。その柱となるのが、(ア)知識・技能の基礎、(イ)思考力・判断力・表現力等の基礎、(ウ)学びに向かう力・人間性等の三つである。これらの資質・能力は、現行の幼稚園教育要領の 5 領域の枠組みにおいても育んでいくことが可能であると考えられる。そのため、幼稚園教育要領の 5 領域は引き続き、維持される方向で、領域「環境」においても変わらぬまま継続されることが示されている。

当校では、保育内容の領域「環境」を、1 回生前期に授業に組んでいることもあり、実際の保育を想像するのが難しい面がある。学生の「環境」についてのイメージの多くは、エコロジーや自然などで、幼児の生活の中にある「身近な環境」や「身近な事象」に対する具体的なイメージが乏しい。領域「環境」では、幼児が環境に主体的にかかわり、生活に取り入れていこうとする力を培うことが求められる。このことは、学生自身が幼児の生活や遊びをイメージしながら、自分の周りの環境に興味・関心を持って主体的に関わることであり、そこで得た様々な気づきを経験することで、知識や技術を学ぶ道筋を培うものである。

そこで本研究では、領域「環境」の授業において主体的な学修を意識した授業方法を試み、学生の修得度を測りながら、領域「環境」を理解し学習成果を上げること目的とする。

2. 研究の方法

本研究では、前期授業である「こどもと環境」を受講した 1 年生に対して、第 8 回授業内（平成 28 年 6 月）で授業評価アンケートを実施した。調査対象者は、平成 28 年度 1 年生のうち当日欠席者を除く 37 名である。各質問には、解答に対する理由または具体的内容の自由記述欄を設けた。その授業評価アンケートを基準として、次の 4 つの方法を授業に

取り入れ、それぞれの授業展開の効果を考察することとした。

①幼稚園教育要領の利用、②視聴覚教材の利用、③体験授業、④グループワーク

3. 結果と考察

(1) 授業内容の概要

授業は15回行い、内容は次の8つの視点を理解することを重要事項とした。

1) 保育の基本の理解と、領域「環境」の位置づけの理解

保育とは、子ども一人ひとりが様々な物的・人的・社会的環境とのかかわり、成長・発達に必要な経験を主体的に得ることができるように援助する営みである。

「領域」とは子どもの発達の側面に対応し、環境構成を含めた総合的な指導を行う際の視点である。そして領域「環境」とは、園生活での遊びを含む様々な経験を保育内容として捉え、適切な発達の援助を行っていくための視点となるものである。

2) 子どもと環境のかかわりへの理解

【身近な自然・生き物とのかかわり】

園庭の土、砂、水といった自然物、四季折々変化見せる樹木や草花、そこに集まる虫、飼育している小動物、花壇や畑で栽培している植物や野菜などに、子どもたちが五感（視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚）を存分に働かせて触れ合う体験を通して、安らぎや豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われる。

【物・文字・記号・数量とのかかわり】

物・文字・記号・数量を使った様々な遊びを楽しむ中で、子どもの興味・関心と感覚が無理なく養われていく。

【情報や施設、園内外行事とのかかわり】

子どもは、絵本や紙芝居、音楽やテレビなどの情報に親しむことで、言葉を獲得し、想像の世界を広げ、開放感や心の安定を得る。また、伝統行事への参加などを通して、歴史や文化への関心が芽生えたと共に、地域の様々な施設の役割と機能を知ること、発見する喜びや知的好奇心を満たすことができる。

3) 園庭の遊具とのかかわりへの理解

園庭には、すべり台、ぶらんこ、砂場、鉄棒、ジャングルジム、雲梯などの固定遊具や、三輪車、スケーター、ボール、竹馬などの自由に移動できる遊具がある。子どもたちは自分の気持ちや状況に合わせて、それらを柔軟に活用できる。それらは遊園地の受身的なアトラクションと違う、自由で発想豊かな遊びである。

4) 室内の遊具・教材・設備とのかかわりへの理解

室内遊びでは、どのような遊具や教材、設備があるのかを知り、それぞれの遊具・教材・設備の特性を理解し、子どもにとって遊びへの意欲を引き起こす魅力があることを学ぶ。

5) 5領域の関係性の理解

5つの領域は幼児の生活を偏りなく見る視点であり、それぞれ独立しているのではなく、幼児の生活全体を見る視点として互いに密接な関係をもっている。このことを踏まえて、園の生活の指導計画について考えていく。

6) 領域「環境」と保育方法

保育方法を一日の生活展開から捉え、さらにどの園においても共通に存在する展開に視点を置いて、領域「環境」を考え理解する。

7) 子どもの「環境」への参加をうながす保育者の役割

保育者自身も、子どもたちが保育環境とどのようにかかわっているかに積極的に関心を抱き、一緒に保育環境に触れながら、子どもの状態や変化を理解することの大切さを学ぶ。

8) 保育内容の総合性と魅力ある保育環境づくり

領域や活動の個性性という枠にとらわれず、子どもたちが楽しい体験をするために、いくつもの活動を取り入れて総合的に展開していく発想性について理解する。そのためにも、

子どもにとって魅力的な保育環境をつくり出していく必要がある。

（２）領域「環境」の授業方法

先の８視点を網羅するために、次の４つの授業方法を実践した。それは「幼稚園教育要領の利用」「視聴覚メディア教材を利用した授業」「体験授業を通して」「グループワークと発表を通して」であるが、順次、具体的に説明をしていく。

１）幼稚園教育要領の利用

平成 28 年度のシラバスを見ると、当校の 1 年前期開設授業では、幼稚園教育要領をテキストとしている授業はなく、参考書として使用している教科がいくつか見られるだけである。保育内容の 5 領域で前期に授業があるのは、領域「環境」と領域「音楽表現」であり、その他は、後期授業や 2 年生での履修となっている。つまり、参考書としての取り扱いでは、経験が少ない学生が具体的にその内容をかみ砕いて読むのは困難だということである。

幼稚園教育要領とは、「21 世紀の生きる子どもたちの教育の充実を図るため、教員の資質・能力の向上や教育条件の整備などと併せて、国の教育課程の基準整備されたもの」と規定されている。将来、養成校を卒業して保育者という立場に就く学生が、国が求めている基準内容の意味を十分に理解せずに卒業していくとすれば、問題であろう。

そこで、領域「環境」の授業では、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領における、保育の基本と領域「環境」の位置づけについて理解を図るために、読み合わせと、それぞれの相違点や共通点についてディスカッションを行った。そのうえで、「内容の取り扱い」が記述してある幼稚園教育要領と解説書は、主に授業で使用し、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領は、参考書として授業を進めていくこととした。初めに、他の教科と重複することに鑑み、幼稚園教育要領第 1 章総則から、なぜ幼稚園教育要領が必要なのか、幼児教育の基本は何かについて説明し、その必要性と 5 領域が総合的に行われていることを教授した。その後に幼稚園教育要領第 2 章・ねらい及び内容の領域「環境」を読み取り、領域「環境」のねらいである「心情」「意欲」「態度」について具体的な事例を示して理解を図った。

また、領域「環境」の内容については、学生が幼い頃に経験した遊び（鬼ごっこ、かくれんぼ、お手玉、笹舟作り、双六、かるたなど）や幼い頃読んでいた絵本などについて、全体でディスカッションを行い、その経験が内容のどの箇所に相当しているかを検討した。

図 1 のアンケート結果では、幼稚園教育要領を利用したことで 24% の学生が理解でき、65% の学生がおおむね理解できたと評価している。しかし 11% と少数ではあるが、理解できなかった学生がいた。

以下は自由記述欄の一部である。

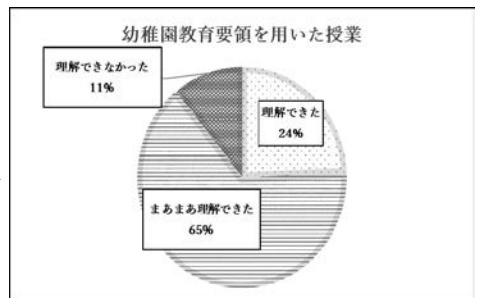


図 1

- 受講してみて自分が経験した遊びや人とのかかわりが、領域「環境」のどの内容にあたるのか気づくことができ、どういった意味であそんでいたのかがわかった。①
- ままごとのねらいには、モノを大切にする力、川遊びは自然と触れ合うねらいがあったことが理解できた。②
- 自分が幼いころ遊んでいた遊びは、考えてみると想像力が発達していたことがわかった。③

- 遊びにはそれぞれねらいがあることが学べた。
- 小さいころ、特に意識せず遊んでいたこと一つ一つに意味があること、それら全て物的環境、空間的、社会的環境などいずれかにかかわっていたことを知った。④
- 領域のねらいがいまいちわからなかった。⑤
- それぞれの遊びがどの内容項目にあたるか、わからなかった。⑥

以上を見ると、①の記述のように、遊びの意味が理解できたり、②③のように一つ一つの遊びには保育者のねらいがあることが理解できたりして、幼い頃の自分の成長と重ね合わせ考えられていることがわかる。また④では、幼い子どもが物的環境や空間的環境、社会的環境などに影響を受けながら育っているということを理解しており、授業の成果が見て取れる。

しかし、⑤⑥のように、領域「環境」のねらいである「心情」「意欲」「態度」について理解できていない学生がいることも事実である。これは、1年前期の講義ということもあり、担当教員が学生それぞれの理解度を把握できなかったために、解説するときの言葉や内容検討、振り返り確認が不足したことが原因だと思われる。今後の課題となった。

次に図1の結果であるが、「理解できた」と答えた学生よりも、「おおむね理解できた」とした学生が多い。これは、講義内容では理解しにくい学生が、自己の遊び体験をクラス全体で具体的に考えたり話し合ったりする時間を設けたことで、領域「環境」がめざす教育的内容がおおむね理解でき、疑問点の解決につながったのではないかと推測できる。一方、遊び経験の少ない学生は話題提供が少なく、ディスカッションに盛り上がりが見られなかった。実習経験のない学生が、幼稚園教育要領領域「環境」のねらいと内容を理解していく方法としては、教科書にある事例からの読み合わせも必要であるが、自己の遊び体験の記憶から考えていくことが重要である。当時の楽しさやスリル感などの印象がよみができることで、好奇心や探求心などの学びにつながることで、実感を伴って理解できるからである。

2) 視聴覚メディア教材を利用した授業

1年の学生は、前期授業の段階では、実習経験が一度もなく、幼稚園や保育所、認定こども園の役割についてほとんど知らないと言っても過言ではない。中学生や高校生の時に授業やボランティアで訪問した学生はいるが、子どもたちと触れ合って子どもを知ることではきたとしても、子どもの発達を理解したうえで、専門職として保育環境の意味と子どもの育ちとの関連性を考えながら観察したわけではないと考える。

そこで、さまざまな園の環境の写真や動画、既成のDVDなどを視聴し、子どもが園庭の遊具や室内遊具、教材、設備などの環境とどうかわり、育って行くのかの理解を図った。その後で子供の学びについてグループで話し合い、発表するという形式で授業を進めた。

図2は視聴覚教材を利用した授業に関するアンケート結果である。ここでは、「理解できた」が49%、「まあまあ理解できた」は51%、「理解できなかった」のは0%であった。先の「幼稚園教育要領をテキストとして使用した授業」とは大きな違いである。保育場面を画像や映像を通して視覚に訴えることで、より具体的で分かりやすくなったと考えられる。

以下は学生の自由記述の一部である。

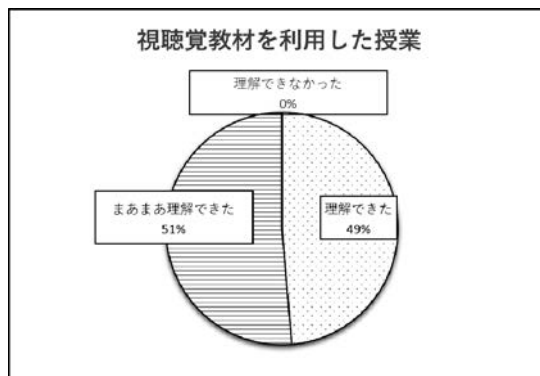


図2

- 自分が園児だった頃、当たり前風景がそれぞれに意味をなして、育つ力につながっていたことが分かった①。教える立場になったとき、育つ力を考えて環境を整えたい。
- DVDをみて、ただ自分の好きなように物を置くのではなく、子ども一人一人に合った環境構成が必要だとわかった。実際の映像を見ることで、イメージがわき、理解しやすかった。
- 保育者がよりよい環境をつくることで子どもたちが自ら遊ぶ力を身に付けることができるとわかった。発達年齢に合わせて保育環境を準備していることが理解できた。②
- 動画や写真で見るとわかりやすかった。子どもたちの興味、関心を高める環境づくりの大切さを知った。③
- 動画や写真のなかに「さわってみよう」と書いてあるその下にピカピカな石やゴツゴツした石が置いてあった。子どもの物に対する興味はこうやって沸き、五感を使ってさまざまな力が育てることがわかった。④
- みんなが一緒に同じ遊びをするのではなく、自分が興味ある遊びを選ぶことがわかった。④
- ④大きさや形、色の違うのれん用ビーズが紐通して遊びやすいように種分けされて見やすく使いやすく工夫されていた。⑤
- 物を大切にすることや友だちを大切にすることなどいろいろな力が身に付くことを知った。⑥
- 環境から色や形、数など様々なことを学べることを知った。⑦
- 将来、自分が保育者になった時に、どういう環境を整えようか想像することができた。⑧
- 環境を整えることで子どもが主体的に活動できることはわかったが、育つ力が何であるのか今一ピンとこなかった。⑨
- 子どもにとって環境の大切さやそれが発達に大きく関わることだと理解できたが、幼稚園教育要領領域「環境」の内容が全部覚えられていないのでどの箇所当てはまるのか要領を見ないとまだ自信がない。⑩

自由記述からは、①②③のように動画や写真、DVDなどを利用することで、主体的な活動を促すために環境を整えることや、保育者が今日の前の子どもたちに必要な育ちのために環境を準備しなければならないことなどが、具体的イメージを伴って理解できていることがわかる。また、④⑤からは、遊びの中で五感を使って成長していくことや、子どもが興味や関心をもった遊びを膨らませながら成長していくことが、理解できていることが読み取れる。⑥⑦では、遊具や玩具を環境として整え、遊びこなす中で心の成長を促すことや、色や形など物の性質が身についていくことが分かっている。⑧では、学生自身が現場に出て保育を実践した時に、環境をどのように整えることが子どもの発達に寄与するのかが、イメージできたように思える。

しかし、⑨のように、子どもたちが環境に主体的にかかわり、生活の中に取り入れようとする育ちの力については、不確実な理解者も見られる。また、⑩では幼稚園教育要領の内容が理解できていない学生の不安がうかがえる。子どもたちが自分から動き出せるような環境をつくる方法について、もう少し具体的な画像を通して解説していく必要性を感じた。そのためには、他の保育現場の動画や既成のDVDだけでなく、学生が保育実習する現場で子どもたちが遊ぶ姿や学生自身の姿を撮るなど、よりリアリティのある画像を授業に採り入れることも視野に入れたい。そうした授業の工夫が今後の課題となった。

3) 体験授業を通して

子どもが、充実した遊びを経験するには、友だちやモノ、環境とのかかわりが重要である。汐見氏は「体験主義の保育」ⁱⁱを提唱し、子どもは本物の体験を求めていると述べてい

る。また、内田氏は「(略) 想像力は豊かな経験から生まれ、想像と経験は依存関係にあるといえる (略)。」ⁱⁱⁱ と述べ、遊びを膨らませるために必要なイメージは、経験したことから生まれるとしている。さらに、平成 21 年度施行の幼稚園教育要領の内容の取り扱いにおいても、「幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然との関わりを深めることができるように工夫すること」^{iv} が求められているとしている。

直接体験の重要性については、平成 29 年度告示の幼稚園教育要領にも継続されている。子どもの成長には体験することが大切であり、その経験内容が豊かであればあるほど発達を大きく促す。そして、これは保育者を目指している学生にとっても、同様のことが言えるのではないだろうか。授業の中で直接体験して理解を深めることこそ、活用する力につながる重要なことである。

そうした考えに基づいて附属のK認定こども園では、園庭や園内、大学校内の散策を行なった。具体的には、各種施設の見学や遊具での遊び、小動物とのふれあい、野草を図鑑で調べるなどの自然体験である。

学生の中には、中学生や高校生のときにボランティアなどで幼稚園や保育所の施設を見学した者もいるが、遊具や道具などが子どもを育てるために必要な環境であることまでは理解できていないと推察する。体験授業のねらいはまさにそこにある。こども園の園庭や施設を実際に見学し、大型遊具で実際に遊びを体験する授業によって初めて、学生たちは実感をもって環境について考え、理解することができるのである。

体験授業の計画・実践に当たってはいくつかの工夫を加えた。その一つがグループに分かれた学習である。学生たちが互いにコミュニケーションを図りながらキャンパス内を散策することで、自分の心と体で感じた体験の中での発見と理解を、子どもたちの成長に関連づけて深化させることができると考えたからである。散策する際には、各自が草花や虫のポケット図鑑を持参し、種類や名前、特徴などを調べたり、自然マップを作成したりできるようにした。できるだけ多くの自然を感じ、その体験や発見を通して実際の保育を考える機会につながるようにした。

図 3 のアンケート結果では、直接体験をすることで、「理解できた」が 65%、「まあまあ理解できた」が 35%、「理解できなかった」が 0% であった。わずかの差ではあるが、この授業で初めて「理解できた学生」が、「まあまあ理解できた学生」を上回ったのである。直接体験することは、テキスト授業や視聴覚教材授業と違い、領域「環境」が目指す好奇心や探求心が、学生自身の内部から生まれやすいからではないだろうか。学生の学修には大きな効果があるといえる。

以下は学生の自由記述の一部である。

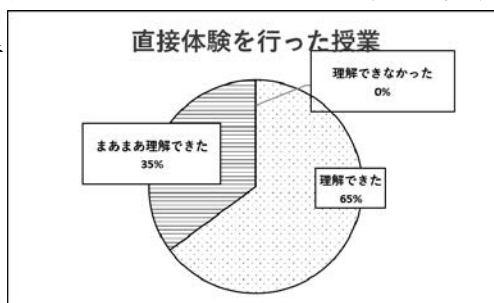


図 3

- 実際に園庭に入らせてもらって具体的に考察しながら環境構成が理解できわかりやすかった。子どもたちの発達につながる環境づくりの方法を知った。①
- 自分の通っていた園と照らし合わせて観ると、共通していたところがあり施設環境や自然環境で大切な所がわかった。②
- いい環境が整っていないと、子ども達の成長に繋がらないし、自分たちで発見し、それについて考えられるような環境が必要であることがわかった。③
- ウサギ小屋の周りにクローバーが生やしてあり、エサをやる経験ができた。野菜を植

裁し育てる経験をしたりしながら「命の大切さ」を知る機会が多いと思った。④ ●野草の名前や特徴を勉強しておかなければならないと気付いた。自然では植物の命を大切に育てることもでき、自然と触れ合うことで豊かな人間性を得ることができることも分かった。⑤ ●自然は子どもの世界を広げていくことを感じた。⑥ ●人工的な環境は安心があり良いと思うが、授業を体験してやはり、自然が子どもには一番良いことが理解できた。⑦ ●自分が保育所に通っていた頃は何も思わなかったが、実際は木を植えることで日陰を作り暑さから身を守る遊び環境や遊具の下にマットを敷いて安全に配慮した環境が整えられていることに気付いた。⑧ ●自分が実際に散策や散歩の前にルートを歩き、どこで教育的な配慮や安全面での配慮を行わなければならない理由が理解できた。⑨ ●自然の大切さが理解できた。自然が少ない地域では、工夫が必要で、保育者はそれを考えて保育しなければならないのだと思った。⑩ ●ただそこに子どもたちの遊びのために遊具が置いてあるのではなく、それぞれ設置されているものには、子どもの発達と見据えて伸ばしたい願いをもって設置するという理由がきちんとあることがわかった。⑪ ●ただ遊具やクローバーがあるのではなく、目的をもって設置されていることがわかり、環境には意味のあるものしかないことが理解できた。⑫ ●散策を行い、野草を観察したり絵に描いたりした。野草からも遊んだり学んだりできることを知った。⑬ ●一見、ただの散歩のようであるが、葉っぱ一枚を見ても、葉脈がはっきりわかる葉っぱと分かりにくい葉っぱがあり、見比べる楽しさを味わえた。自分の中で新しい発見になったし、理科の学習が自然にできていた。⑭ ●実際に園庭を見たことにより子どもたちの遊ぶ姿がイメージしやすくなり、様々な環境が整えられていることに気付いた。⑮
--

自由記述の①②③では、実際に自分の体を使って経験したことにより、子どもの発達につながる環境の必要性や、環境を整えるポイントなどについて理解できたことが記されている。また、④⑤では、実体験から命の大切さや豊かな人間性を育むことにつながることに気付いている。⑥の「自然は子どもの世界を広げる」と回答した学生は、草花の特徴を調べたり、触ったり、においを嗅いだりしながら、五感を使って遊ぶ未知の体験を行ったことで、世界の広がりを感じたようである。⑦では、人工的な玩具の良さも認めながら、自然で遊ぶ良さも感じ取っている。⑧⑨の学生は、安全に過ごせる環境の大切さを理解し、下見などを行い、事前準備しておくことが子どもの命を守ることにつながることに深い理解を示した。⑩のように、保育現場の地域環境に応じて環境を整えるために、保育者の工夫が必要であることを感じた学生もいる。⑪⑫では、環境構成には、遊具や道具が整えられている意味があることに気付いている。⑬⑭の事例では、草花や虫などの自然で遊ぶことが子どもの発達に大きな影響を与えていくこと、そしてその遊びが小学校教科につながっていることを理解している。

以上のような体験学習の成果を総まとめするような記述が、⑮に見られる。屋外で直接体験することによって保育を具体的にイメージでき、幼稚園教育要領のねらいと内容の理解に繋がったのではないだろうか。加えて、戸外で行われる授業の開放感もあり、学生の気分も新鮮で集中力が増したと思われる。

ところで、後藤氏は領域「環境」の授業にネイチャーゲームを取り入れ、その学修効果を発表している。その中で指導者については、「ネイチャーゲーム初級指導員の資格を持つ教員が学内において実際に指導している」と述べている。この場合、大学教員自身がその

ような資格を取得しているか、あるいは資格保持者と協働で授業計画を立てて実践していくことが必須条件である。それと共に、自然豊かな野山が近隣にあることも欠かせない。

当校では、保育現場経験者が一人で領域「環境」を担当しており、保育現場で取り入れた自然を使った遊びを学生と共にやっているが、ネイチャーゲームの専門家ではない。また、少し離れた場所にその対象となる野山はあるが、10分間の休憩時間に移動することが難しい。その上、学内規定には「学外での授業の場合、補助教員を設けて授業に臨むこと」とあり、授業に自由さが少ない。

当日は、各自にポケット図鑑を用意させたが、個人の持ち物は少なく、図書館から借りていた。しかし、それでも複数の学生が一冊を利用して調べる姿が見られ、全員に行き届いていない現実があった。これらを考慮しながら、より良い学外学習をどのように取り入れ計画していくかが今後の課題である。

それと共に、学生自身が卒業して保育者となったとき、自然と関わる遊びをどのように保育に採り入れて実践しているかなどについても、追跡調査が必要である。もちろんその成果は、幼稚園教育要領、保育所、保育指針、幼保連携認定こども園教育・保育要領における、領域「環境」で規定されている内容につながるものでなくてはならない。

4) グループワークと発表を通して

平成24年3月28日の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」^{vi)}では、生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生から見て受動的な教育の場では育成することができないとしている。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、学生が主体的に問題を発見し、答えを見出していく能動的学修（アクティブ・ラーニング）の必要性が求められている。

そうした主体的な学修を促す有力な方法として、ディスカッションやディベートを取り入れた

授業がある。グループワークと発表を組み合わせることによって、さらに個々の学生の認知力や倫理的、社会的能力が引き出され、学生は将来にわたって主体的に社会貢献できる能力を磨き続けていくことができる。

そこで当校の「こどもと環境」の授業においても、幼少期に自己体験した遊びを通しての学びや、子どもの姿から見えた発達と環境構成、自然を保育に取り入れる方法など、様々な授業内容の中で、グループワークやディスカッションを取り入れる試みをした。

図4のアンケート結果に見るように、グループワークや発表を行った授業では、理解できた学生が76%、まあまあ理解できた学生が24%となり、理解できなかった学生は0%であった。話し合いの学修効果は極めて高いことが読み取れる。以下は学生の自由記述の一部である。

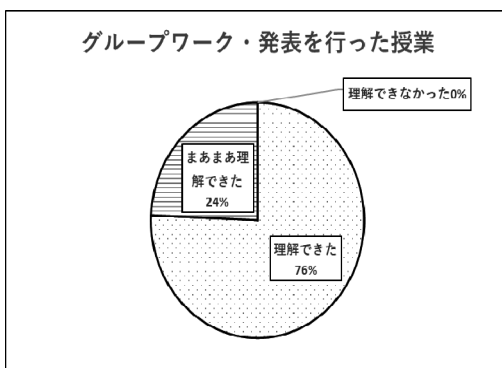


図4

- 自分と違う考え方の人と話すことで、新しい発見ができた。①
- 自分とは違った意見をみんな持っていて、それを交流することでより深く勉強が進むと思った。
- 住んでいる地域によって遊びや行事が違うことを改めて知った。友だちの体験談を聴くことは楽しかった。
- 自分と違う意見が沢山出たので自分の知らないことを学べた。自分が理解できてなかつ

- たことを教えてもらうことも出来たので新しい考えが自分に生まれたりもした。②
- 他者の意見を聞いて知識が増えた。自分以外の意見を聞き、考えを発展できた。③
 - 「こんな意見もあったのか」と考えが深まり勉強になった。④
 - 友だちと共感できることで考えが深まった。視野が広がった。⑤
 - 自分と他者との遊び経験が違うことがわかった。⑥
 - 人の話を聞いて、昔の遊びがわかった。自分自身はほとんど覚えていないから。⑦
 - 実際に保育者を目指している意識の高さからいろんな考え方を知った。
 - 自分以外の意見を聞いて、沢山の感じ方、考え方が浮かび、毎回とても良いグループワークができた。
 - みんなの意見を聞いて保育者になった時、子どもたちといろんな遊びをしたいと思った。
- ⑧
- 一人で考えるよりグループで考えた方が深くより良い話し合いができた。⑨

上の自由記述①～⑤では、グループワークと発表によって新しい発見や新しい考えが生まれたり、自分の考えを深め、発展させることができたりして、勉強になると実感していることが読み取れる。また、⑥⑦では他者との生活環境、遊び環境が違うことを知ったり、自分自身に全くイメージできない質問内容であっても、他者の意見や思いを聞くことで理解できたりしている。⑧の学生は、卒業後への夢を持てるようになり、⑨では、グループワークでの学びの効果を実感しているように見受けられる。

グループワークとは、学生を討論や共同作業などにグループ単位で参加させることによって、メンバー間での相互作用を通して個人の成長を促進する方法のことである。佐藤氏によれば、グループワークにおける大学教員の役割は、「ファシリテーター（促進する人）」だという。ファシリテーターに求められるのは、原則として聞き役に徹することや、必要に応じて学生の討論を促すこと、そしてフィードバックのためのコメントを適宜出すことである。具体的には、グループワークの最後に学生の良い点を積極的に誉め、よくなかった点をどう改善するかについて考えることを促すようなことで、学生の自己評価を助け、学生の課題発見・問題解決能力やディスカッション能力を伸ばすことができる。^{vii}以上が氏の唱える「ファシリテーター」の骨子だが、上のアンケートからは、担当教員が「促進する人」に徹したことで、学生がより良い話し合いができたと感じていることや、ディスカッションするときの雰囲気の良さが読み取れる。

グループ発表では、自分たちが話し合ったことを報告した後に、発表者が他グループからの質問に回答する形式をとった。この方法により、双方がさまざまな考え方のあることを理解する互惠性が生まれる。授業の最後には、学生の発表内容をもう一度、教育的な言葉で説明し直しながら全員に理解を図り、発表者の考えを認めていくことで主体的に発表することへの自信につながった。

また、授業の中で「グループワークと発表」という授業方法を何度も取り入れることで、学生同士の相互作用を通して、一人ひとりの成長を促すという効果もある。例えば授業開始の頃は、ディスカッション慣れしていない学生の中には、自分たちの発表に対して反対の意見を言われると、涙ぐんだり、委縮したり、感情的に反論したりする姿も見られた。授業担当教員は、人はそれぞれその人なりの感じ方を持っていることを認めること、そして自分の感じ方や考え方が異なっている、その人にとっては意味のあることとして大切に受け止めた上で話し合いを進めることを、繰り返し指導した。その結果、最後の授業では学生が主体的に発表や質疑応答を行い、相手の意見をうまく受け止めながら、自分の考えや今後の課題などを整理して発表する姿が見られた。

ところで、グループワーク授業に際しては、実施以前にも教員にとって重要な仕事がある。それは、グループ分けをどのように決めるかという問題である。名前順に着席している授業や自由に座る授業などさまざまな形がある中で、どのグループに入るかは学生の人

間関係に大きく影響することも考えられる。主体的な授業を考えた場合、グループ作りから学生に任せることが理想ではあるが、コミュニケーション力が弱い学生は、グループに入ることさえ難しいこともある。特に、1年生の前期に行う授業では、まだまだ学生同士の関係性ができていないのが現実である。ワークのグループをどのように作るかは、今後の課題である。それと共に、授業後に感想やアンケートを取って分析し、グループワークの効果度をさらに高めていくことも課題となった。

4. おわりに

本研究では、学生の学修の向上を目標に、保育内容「環境」の授業において、4つの授業展開（①幼稚園教育要領を利用した授業、②視聴覚教材を利用した授業、③体験授業、④グループワークや発表形式）を実施し、学生へのアンケートや自由記述を通して、どの方法が保育環境を構成する力量形成に働くのかの考察を試みた。各図の「理解できた割合」から見ても判る通り、グループワークや発表という授業形態が最も効果の高いことが明らかになった。これは学生が主体的に授業を進めていくことが、学生の学修内容の理解や学修意欲の高まりにつながることを物語っている。

はじめに確認したように、保育者に求められているのは、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が示す「環境」にかかわる保育内容の基準に基づき、幼児が環境に主体的に取り組み、生活に取り入れていこうとする力を培うための保育環境を構成していくことである。この能力は保育内容「環境」の授業においてのみ修得できるものではない。今後は、子どもの育ちにつながる、魅力的な環境構成を手掛ける能力を身に付けさせるためにも、他の教科との連携を踏まえ、授業で培った知識や技術をさまざまな視点から応用・発展させながら、効果的な授業法を継続的に研究していきたい。

引用文献

- i 「中央教育審議会教育課程部会幼児教育部会（幼児教育部会における審議の取りまとめについて（報告））文部科学省 2008
- ii 汐見稔幸「その子らしさを生かす・育てる保育」萌文社 pp.144-45 1995
- iii 小田豊・服部祥子・無藤隆監修「これからの子育てへの提言」ひかりのくに p.110 1998
- iv 文部科学省 「幼稚園教育要領」 p.18 2017
- v 国際学院埼玉短期大学研究紀要「保育者養成教育におけるネイチャーゲームの可能性について（4）」 p.34 2007-03
- vi 中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」文部科学省 2012
- vii 佐藤浩章編「大学教員のための授業方法とデザイン」 p.87 2016

参考文献

- ・宮原和子・宮原英種編「知的好奇心を育てる応答的保育」ナカニシヤ出版 2004
- ・加藤茂美・秋山麻実・茨城大学教育学部附属幼稚園「5歳児の協働的学びと対話的保育」ひとなる書房 2011
- ・汐見稔幸著「子どもの学力の基本は好奇心です」旬報社 2008
- ・榎沢義彦・入江礼子編「保育内容 環境」建帛社 2009
- ・平山許江著「領域研究の現在＜環境＞」萌文書林 2013
- ・柴崎正行編「演習保育内容 環境」建帛社 2016